

# ミステリ読書案内

2023. 5. 12 発行元

第476号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## かつての名作・傑作 その1

466号に続いて1970年代～1980年代にかけての作品の中で、私が数冊しか読んでいない作家の傑作、名作と思われる作品を紹介していく。今回は1970年から少し時期がずれた作品も入れてみた。

### 私が大学生になる前の作品

今回取り上げた三作は私が大学生になる前に書かれたものである。ミステリは今ほどには注目を集めていない時代で、名作・傑作もぼつりぼつりの状態だった。

1970年。この年の推理作家協会賞は陳舜臣の『玉嶺よふたび』『孔雀の道』であり、都筑道夫の『黄

色い部屋はいかに改装されたか』が出された年である。記録を見ると『横溝正史全集』（講談社）『角田喜久雄全集』（講談社）『木々高太郎全集』（朝日新聞社）などが発刊されている。『江戸川乱歩全集』（講談社）『夢野久作全集』（三一書房）『久生十蘭全集』（三一書房）『小栗虫太郎シリーズ』（桃源社）などが出たのがその前年の1969年である。

### 海渡 英祐 「伯林—一八八八年」

1967年講談社。江戸川乱歩賞受賞作品。森鷗外を主人公にした歴史ミステリ。森鷗外の『舞姫』に結び付くようにも考えられている。本書で扱っているのは、題名のとおり1888年の出来事。陸軍一等軍医としてドイツのローベルト・コッホ研究所に学ぶ日本人留学生の立場で登場してくる。冒頭には北里柴三郎も。当時のドイツをめぐる情勢について詳しく触れ、史料調べがしっかり成されていることを感じる。

友人の岡本と一緒に劇場で観劇をした後、ベルタ、エリス、クララなどの女性たちと知り合うことになる。その後、その中の一人の自殺現場に立ち会うことになる。この関りの中で外務省のフォン・ベルンハイム伯爵のシムメル・シュロスの館を訪ねることに。この館の構造については図が示されている。吹雪に中何人かの客達が集まり、最後に登場してくるのは当時「鉄血宰相」と呼ばれていたビスマルク。このビスマルクは第一次世界大戦に繋がる歴史上の大人物。そして、突然館に銃声が響き渡り、皆が伯爵の部屋の前に集まることになるが、鍵穴には何かが詰まっていて扉は開かず…。密室の状態なのか…。森鷗外は、ドイツの女性との恋に悩みながらも探偵の役目をこなすことになっていく。

### 藤原審爾「新宿警察」

1975年双葉社。とは言いながら『新宿警察』シリーズが書かれ始めたのは1950年代頃なので、その意味では時期が外れているとも言える。1970年代にはテレビドラマ化されていき、注目を集めたことは間違いない。私が持っているのは2009年の双葉文庫。何冊かの分冊になっている。

特徴はマクベインの『87分署シリーズ』よりも更にハードボイルド的な描き方をした警察小説だということ。長編もいくつか書かれたようだが基本は短編。何編書かれたかは把握されていないようだ。1950年当時は存在しなかった新宿署を舞台にし、所轄の刑事たちが日常的に起こる犯罪に立ち向かっていく様子が展開していく。当時の人々の考え方、生き方や新宿の街の雰囲気伝わってくる。

中心になる人物は根来刑事、戸田刑事、三浦刑事。指示を出すのは仙田刑事。そして、新宿署の生き字引と言われる徳田老など…。古屋の取り壊し現場から発見されたバラバラ死体。本庁が出張ってきたが二ヶ月経っても未解決。そこへ硫酸掛け事件が発生。刑事たちは新宿で暮らす人達の中に入り込んで聞き込みを続ける。

### 小峰元 「アルキメデスは手を汚さない」

1973年講談社。江戸川乱歩賞受賞作品。私が大学生になった時にはかなり話題になっていた本。ただ、小峰元という作家はそれほど活躍期間は長くなかったし、現在では注目度は下がってしまった感がある。本書以外の作品は手に入りにくくなりつつあるようだ。テンポの良い、青春ミステリで、その後の作家たちに与えた影響は大きかったと思うのだが…。

冒頭はある女子高校生の葬儀の場面。多くの関係者が集まって故人を見送るのだが、陰で囁かれているのは、亡くなった生徒が妊娠中絶手術の失敗によって亡くなったということ。亡くなる直前には意味不明の「アルキメデス」という言葉を残している。けれども誰が相手なのかは口を鎖したままだった。続いて同級生の男子生徒の弁当に毒が混入される事件が起こり、その生徒の姉の恋人の行方不明に発展していく。疑心暗鬼が渦巻く校内の状況に…。密室風の仕掛けや列車・船を利用したアリバイ崩しなども絡めて展開していく。この作品の一番の特徴は、高校生を含めた若者たちの生態が生き生きと描かれていること。生徒たちの梓にはまらない思いがけない発想と行動が物語全体を引き締めている。読みやすく一気に最後まで読める。